

粘土の秘密

イーシャ・サーデサイによる再話

旅人が深く息を吸い込むと、甘い香りのする空気が肺に流れ込みました。彼女の吐く息はため息となって出てきました。彼女は深く満足していました。周りは山々に囲まれており、粘土と堆積物の組み合わせが鮮やかなしま模様を見せていました。それらの外観は赤褐色や大地を思わせる緑、目を見張るような黄色のしま模様でした。

この気候はかなり温暖で乾燥していましたが、だからといって草地やまばらな低木や花の茂みがないわけではありませんでした。女性はそれらすべてを熱心にじっと見ました。彼女がわが家と呼ぶ場所から遠く離れたこの辺境の地は、その美しさにおいてユニークで並外れたものでした。彼女はそれを記憶にとどめる何か——さっき通り過ぎた道端の屋台からの土産物以上の何か——を求めています。彼女はその土地を思い出す手段が欲しかったのです。

そんな考えが頭の中を駆け巡った時、ふと下に目をやると、地面には粘土の破片が幾つか落ちていました。その中でも特に一つの破片に目が引かれました。

それはゴルフボールより少し大きく、ほぼ同じくらい丸みを帯びていました。その色は周囲の山々で見たのと同じさびた赤で、その表面には細い黄色の筋が曲線を描いていました。子どもの頃に遊んでいたネコの目のようなビー玉を突然思い出しました。

「まあ、すてきじゃない!」と、彼女は叫び、かがみ込んで粘土の塊を拾い上げました。

彼女はポケットからハンカチを取り出し、その中に粘土を丁寧に包み込みました。「私はあなたを寝室に置くことにするわ」と、彼女は嬉しそうに言いました。「そうすれば、私が何者であるかをたくさん垣間見せてくれた世界のこの部分を、毎日思い出せるから」

1週間ほどたって、女性は家に帰りました。その言葉通り、彼女はその粘土を寝室の、旅先で集めた他の品々をすべて収納した大きなたんすの上に置きました。その場所はぎゅうぎゅう詰めで(彼女は熱心な旅行者でした)、竹の扇子と緑がかった液体の入った小瓶の間に粘土を押し込まなければなりませんでした、最後には何とかそれを置くことができました。

その後の数日間、女性は忙しく過ごしました。彼女は旅から日常に戻り、いろいろ用事を済ませたり、友人や親戚に会ったり、家の周りで修理の必要なものを直したりしました。しかし、寝室に入るたびに肩の力が抜け、呼吸は緩やかになりました。気のせいなのか分かりませんが、この空気はほのかに甘い匂いがしました。それはとても気持ちの良いものでした。

さらに数日がたち、女性はそれが気のせいなどではないとますます確信するようになりました。空気は間違いなく甘くなっており、実際、とても香りよく、うっとりしてしまうほどでした。花や森の香りが漂い、飛び切りなじみ深いのと同時に神秘的な遠い土地を連想させました。「この香りは何で、どこから来るのだろう？」やがて、家中がうっとりするような神秘的な香りで満たされました。

その出どころを見つけようと決意して、女性は家の中を調べ始めました。最初にその香りに気がついた場所だったので、寝室に目を向けました。ある時は、床にはいつくばってベッドの下を確認しました。悲しいかな、そこには何もありませんでした。しかし、頭を持ち上げた時に嗅いだ匂いがあまりにも強烈で、危うく両腕の上に倒れ込みそうになりました。

慌てて起き上がり、彼女はその匂いの方に移動しました。それは、たんすがある部屋の一番奥まった所からやって来るようでした。

「そうだ！」彼女は心の中で思いました。「私は旅先からたくさんのエキゾチックな香水や香油を持ち帰ってきていた。その中の一つのふたを閉め忘れたに違いない」

彼女はたんすの上の品々を、大切な思い出の品々を見ました。あらゆる大きさと形のガラスの小瓶や広口瓶がありました——けれども、よく調べて見るとそのすべては密封されていて、栓はしっかりとガラス瓶に押し込められていました。

けれども、あの香り！ ここではとても強くて、彼女を圧倒するほどでした。女性は自分が近くにいると確信しました。

彼女はそわそわと周りを見回し、そしてそれを見つけました——たんすの奥に何食わぬ顔で座っている粘土の塊でした。ランプの薄暗い光の中で、その上部を横切る黄色いしま模様が柔らかに輝いているように見えました。

「あなたなの？」潜めた声で彼女は粘土に尋ねました。「とても甘い香りがするのはあなたなの？」

彼女が両手で粘土を持ち上げると、すぐさま分かりました。そこから香りの波が漂い、外国で出合った最上の花の香油よりもぜいたくな芳香を放っていました。それは、ベルベットのようない花びらと曲がりくねった緑色のつるが絡み合ったみずみずしい庭園のような、そして沈香(じんこう)木のように威厳があり強烈な何かのような香りがしました。しばらくの間、女性はその香りに包まれながら目を閉じてただそこに立っていました。

それから彼女のマインドが働き始めました。「このように香るのがあの粘土なの？ そんなことがあり得るの？」

彼女は目を開けてその粘土の塊をじっと見詰めました。それは全然そのようには見えませんでした。

「あなたは何ものなの？」と、彼女はささやきました。「あなたは変装した宝物？ 別世界からの高貴な贈り物？ 少なくとも、甘い香りの薬草が詰められていたことがあるの？ 私はあなたが誰なのかを知りたい。あなたが何なのかを知らないではいけない」

粘土が返事をしたのはその時でした。

「私？」粘土が言いました。「私はただの粘土の塊にすぎない」

「いえ、いえ」と、女性主張しました。「そんなことはあり得ない。あなたはとても素晴らしい香りがする。どうかこの香りがどこから来るのか教えて」

粘土が再び話しました——あるいは、それはしま模様の山々や花の茂みの記憶と共に、内側から現れた彼女自身の英知だったかもしれません。

「分かった、私の友よ。あなたに私の秘密を打ち明けよう。私は粘土の塊にすぎないが、砂漠にいた時は、ずっとバラと仲間だったのだ」



© 2024 SYDA Foundation®. 著作権所有。

これは、グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダが教えの旅のサツァングで話した物語の翻案です。その起源は13世紀のペルシャの詩にあります。